

2010年9月12日から29日まで、サンパウロ大学日本文化研究所より招聘研究者をお迎えしました。

若手研究員招聘事業の訪問研究 —訪日の成果



菊池 渡 (サンパウロ大学 助教授)

非文字資料研究センター若手研究員招聘事業の訪問研究員として9月12日から29日の18日間、神奈川大学に滞在した。到着した日は曇りであったが、翌日から30℃近い残暑となり、それが雨と変わり、帰国間際には15℃に下がるなど、変則的な気温の変化、天候不順が世界的な現象であることをまざまざと見せつけられた感じであった。

改めて述べるまでもないが、非文字資料研究センターは世界の諸大学機関と若手研究者育成を目的とした学術協定を結んでおり、私が所属するサンパウロ大学日本文化研究所とは2年前に協定が結ばれたが、私はサンパウロ大学で、初めての訪問研究員となった。何事にも「初めて」にはそれ相応の責任とプレッシャーが付きものである。

訪日の目的は現代日本社会の階層、上下関係に関する文献の調査とフィールドワークの可能性を追求することであった。13日に行われたガイダンスを終えたあと、さっそく神奈川大学の図書館に通う日課が始まった。折りしも休講シーズンで、利用者も少なく、コピー機もほとんど独占状態で文献調査もはかどり、当初リストアップしてきた約40冊に加えて20冊、論文も10本ほど追加することができた。神奈川大学の図書館の蔵書は充実しており、ほとんどの書物を閲覧することができたが、その他を事務局の的確な取り計らいで日本常民文化研究所、そして東京大学の各図書館を訪問し、補足することができた。

結果として、当初の目的であった文献の他にもいわゆる「ウチソト」や「公私」に関する示唆的な書籍にあたることができたことも特筆したい。「ウチソト」と上下関係の関連は未だに理論的に統合されていない感がある。「ウチソト」は社会的アイデンティティ理論では内集団、外集団と呼ばれ、日本社会特有のものではないが、あえて日本社会における特殊性を挙げるならば、それは独自性という意味ではなく、他の社会よりも顕著な形で現れる帰属集団内、集団外における態度、姿勢の乖離ということになり、これは長い歴史の間に培われてきたもので

ある。「公私」の問題も天皇制と関連している以上、複雑であるが、特に戦前、戦後の日本社会における上下関係を語る上で避けて通れないテーマである。週れば律令制に至る「公私」も現代社会では企業一従業員、上司部下の関係に収斂されるという解釈もあるが、いかがなものだろうか。

また、今回の訪日ではフィールドワークの可能性についても、関連文献を購入することができ、特に最終日の発表とその後の先生方とのディスカッション、コメントから有益なヒントと調査の糸口をつかむことができた。結果として、あらゆる意味で、今回の訪日で当初の期待以上の成果をあげることができたのは言うまでもない。

以上のように学術的な成果はもとより、今回は6年ぶりの訪日であったこともあって、旧交を温めたり、新たな出会いもあり、特に「居酒屋会合」のほうは、日本到着の翌日に偶然にも上京していた大学教授である知人と会ったのを皮切りに、毎日のように続き、最後はセンターが開いてくださった帰国前日の送別会であった。翌日の帰国の便が午前10時45分と早いのと時差調整の意味も含めて、その夜は寝ないで荷造りをし、4時40分に宿舎をあとにした。いずれにしても日本の「飲み会文化」を再確認し、体当たりの文化体験ができたことも望外の成果としたい。

久々の日本にはいろいろな変化が見られたが、6年前に比べて、人々の表情が明るくなっているようにも感じられた。「停滞の20年」などと言われているが、当然ブラジルなどと比較すると、生活水準は断然高く、市民も新たな時代に順応してきたということだろうか。もっとも、東京の友人いわく「そんなに毎日楽しんでいたら、みんな明るく見えるよ」では身もふたもないのであるが。

最後にこのような貴重な訪日の機会を与えてくださった非文字資料研究センター、指導してくださった橘川教授をはじめとする先生方、また事務局、日本常民文化研究所や図書館関係者の皆様方に厚くお礼を申し上げ、ペンを置くことにしたい。